

金利を味方に付ける（後編）

前置き無しで早速金利を味方にするためのルールをお伝えします。前編の最後に記したように、『金利を味方に付ける』ためには、**お金を貸す側になることです**。話を進めて行く上で、大切な言葉を2つ記しておきます。『直接金融』と『間接金融』。学生時代、公民科の『現代社会』の勉強で学習した言葉だと思います。少し復習してみましょう！

まず直接金融とは、お金を貸す側と借りる側が直接やり取りして行う金融取引です。一方間接金融とは、お金を貸す側と借りる側の間を銀行等が間に入って（仲介して）行う金融取引です。

もう少し詳しく直接金融から解説していきます。直接金融は、資金を提供する投資家と資金を必要とする企業や国などの相手が直接結びつき、代表的な例としては株式や国債・社債です。上場（東京証券取引所・ジャスダック・マザーズ等々）企業の株式や債券は市場で自由に売買出来ます。メリットは投資家にとって預金（後述の間接金融の代表例）と比較して、利息や配当、売却益などによるリターンが見込めます。デメリットは投資家が自ら企業の経営状態（国や地方

公共団体であれば財務状況) や将来性から投資するかの判断をするため、直接リスクを負うことです。補足として、資金の提供を受ける企業側からすると、銀行からの負債として銀行側から決められた金利で融資(資金供給)を受ける代わりに、自社の信用力や将来性、安全性を利用して金利(クーポン)を自社で自由に決めた社債を発行することが出来、株式の場合は業績により配当金を分配すればよく、経営上自由度が高くなる。分かりやすく言うと、お願いして貸す側の条件でお金を借りるのか、向こうから進んでお金を使って欲しいと言ってくる人に対して、こちらの条件でお金を使ってあげることが出来る。少し簡単に表現し過ぎて傲慢に聞こえてしまうかも知れませんが、分かりやすさ重視ということで勘弁してください。

次に間接金融について、間接金融は我々日本人にとって馴染みのある仕組みなので取引関係の話は省いて、代表的な例の銀行や郵便局の預貯金についての解説からしていきます。個人や法人が銀行にお金を預けて、銀行の判断で資金を必要とする相手(企業や個人)に貸します。貸した相手から得る利息の一部を預金者に支払い、残りが銀行の利益になります。住宅ローンを借りている個人の方であればとっても分かりやすいと思います。ローン金利(金利>利息)を銀行は受け取り、その一部を預金者は銀行預金利息(利息<金利)として受け取り、残りが銀行の利益になると言うことです。メリットは預金者から集めたお金を銀

行の判断で貸しているため、貸付けている企業や個人の返済が滞ったり、企業であれば倒産、個人であれば破産したとしても、銀行がリスクを背負うため、預金者は基本的に影響を受けません。また、お金を貸す人や企業のことを直接金融と違い、調べる必要がなく時間と労力の節約になります。デメリットは預金者は自分のお金を銀行がどこに貸しているかを知ることが出来ません。もちろん、どのように利用されているのかも分かりません。また、預けたお金で得た利息の一部は銀行の利益となるため、普通預金だけでなく定期預金も金利は低く、お金を増やすスピードは極めて遅くなります。

以上、直接金融と間接金融の説明とメリット・デメリットをお伝えしましたが、『金利を味方につける』と言う意味では、両方の金融商品を使い分ける必要があります。とりわけ、資産形成を加速させるという部分においては直接金融に分がありそうです。ご自身のお金（資金）を直接必要としている会社や国・地方公共団体に貸す（提供）ことで、金利を味方につけることが出来、皆さんの資産が目標の金額に達するまでの期間を短縮することが出来ます。弊社が扱う保険でもこの直接金融の仕組みを利用できる商品もあります。興味があればご相談ください。

最後に、間接金融の代表である銀行について、身近にあり過ぎて、且つ多くの

方にとっては一番馴染みのある金融機関であるため、逆にその役割を理解しないまま利用しているのではないかと思ひ、歴史的な部分を簡単に解説していきます(2020年7月、銀行を舞台とする人気ドラマ『半沢直樹シーズン2』がTV放映されていることですし、ってあまり関係ないか!?)。戦後、日本とドイツ(西ドイツ)所謂敗戦国は戦後復興資金として、間接金融(銀行が主役)の機能を徹底的に活用して国民から資金を集め、それを産業界に融資することによって、世界が驚く経済成長を実現して来ました。この話、以前別のコラムで書いたような記憶があったので調べて見たら、やっぱりありました。[詳しくは資産形成コラム『リスクを理解する\(前編\)』に掲載されていますので、そちらを参照ください。](#)敗戦からの復興は全てを失ったと言っても良い状態の日本にとって、まさに奇跡でした。その中で世界的な企業が育ち、1980年代は正に日本の時代、**ジャパン アズ NO.1**と世界中から賞賛を浴びていました。戦後直ぐに設立されたソニーのような企業はもちろん、戦前からある東芝や松下電器のような企業でさえ、財務内容は散々、将来性や安全性は不透明、と言うかそんなもの(将来・安全・安心)なんてどこにも無い時代。そのような企業に対して個人(国民)が直接金融でお金を融資するなんてそうそうありえないし、考えもつかない。国民も日々食べて行くだけでやっとの時代、銀行が厳正な審査基準のもと、各企業の将来性を十分に調べて、時に時間をかけて丁寧に融資していく。その資金で優

秀な経営者や技術者が企業を発展させ、利息を銀行へと支払う。そして、その一部を利息として受け取り、日々目の前の仕事や家事・子育てに邁進出来た国民。この間接金融による好循環によって、今の日本があることは間違いないと思います。一方、現代日本は成熟期であると同時に個人投資（直接金融）を行う環境が整っています。間接金融が全ての金融の役割を担っていた時代は終わり、個人が自らリスクを理解し資産形成を行っていく時代に既になっています。

資産形成には知識と時間（期間）の両方が必要です。サンシャイン〇崎ではないですが、「皆さ〜ん、今がチャンスですよ〜！！」。いつでも相談に乗ります。と、宣伝してこのコラムを終了したいと思います。

“木を植えるのに最も良い時期は、20年前である。次に良い時期は今である。”

（中国の諺）

S L 2 3 0 8 - 3 2 2 0 - 6 6 2 0

ソニー生命保険(株) 大分支社

〒 870-0029 大分市高砂町 2-50

オアシスひろば 21 9階

TEL 097-532-9200

ライフプランナー 山田新悟